

茶から通常検出されない核種が検出された。なお、平成 24 年度は、震災以前の測定結果とほぼ同じレベルであった。

○九州・沖縄・山口地方における酸性雨の状況について

・中村雅和，濱村研吾¹⁾，岩切淳，福地哲郎，眞崎造成，黒木泰至

¹⁾ 福岡県保健環境研究所

「第 54 回大気環境学会年会
(平成 25 年 9 月 18 日 新潟市)」

九州・沖縄・山口地方酸性雨共同調査研究により平成 14～23 年度のデータを解析した。nss-SO₄²⁻に関して，九州北部、九州西部及び九州中部においては，湿性沈着量等が平成 14～18 年度は増加（上昇）傾向にあったが，平成 19 年度以降は減少（低下）傾向を示し，中国における SO₂ 排出量の変動と連動した動きを示したことから，中国からの影響を受けていると考えられた。一方，九州南部では，近年も増加傾向を示したが，これは火山活動の影響によるものと考えられた。また，九州北部では近年も NO₃ 湿性沈着量が増加傾向にあり，NO₃ においても越境汚染の影響を受けている可能性が考えられた。

○平成 24 年度における大気汚染物質高濃度事例について

・福地哲郎，眞崎造成，中村雅和，岩切淳，森下敏朗¹⁾

¹⁾ 食品開発センター

「第 39 回九州衛生環境技術協議会
(平成 25 年 10 月 10 日 宮崎市)」

平成 24 年度の大気汚染常時監視において発生した環境基準超過等の高濃度事例について，原因の解析を行った。日南市および都城市で 5 回発生した二酸化硫黄の環境基準超過事例は，いずれも後方流跡線や桜島の噴火状況等から桜島が原因と推測された。延岡市，高鍋町などで 5 月に光化学オキシダントが高濃度となり，延岡商業高校で年間最高値となった事例，延岡市および高鍋町で 5 月に発生した浮遊粒子状物質の環境基準超過事例，延岡市で 5 月に微小粒子状物質が年間最高値となった事例は，いずれも，後方流跡線やその他の気象条件等から，大陸からの越境汚染が原因である

ことが示唆された。

○宮崎県西部平野部等における地下水中の硝酸性窒素濃度について

・三坂淳一，杉本恵¹⁾，中村公生，赤崎いずみ，溝添光洋，河野通宏，坂元勇太，黒木泰至

¹⁾ 宮崎県都城保健所

「第 39 回九州衛生環境技術協議会
(平成 25 年 10 月 10 日 宮崎市)」

都城盆地硝酸性窒素対策推進連絡会議の調査研究部会として，第 1 ステップ(平成 17～22 年度)に測定した水質分析の結果を解析した。調査全井戸の硝酸性窒素濃度の平均値はやや減少傾向であるが，依然として盆地中心部では硝酸性窒素濃度が高かった。各井戸毎の変動では，盆地中心部は減少傾向にある井戸が多く，盆地周辺部は増加傾向にある井戸が多くみられた。観測井の結果から，大淀川左岸では浅井戸に明らかな汚染がみられるが深井戸では汚染がないものの，大淀川右岸では深井戸にも汚染があり，不透水層の破綻等による上層からの汚染の疑いが考えられた。

○底生動物調査（ゲンジボタル等）における外来種コモチカワツボの出現について

・岩切淳，河野通宏

「第 39 回九州衛生環境技術協議会
(平成 25 年 10 月 10 日 宮崎市)」

ゲンジボタルの減少に悩む県内自治体から，その原因の調査依頼があり，水質調査，底生動物調査，採取された貝類の金属成分分析，成虫の体長及び成虫の発光量について調査した。水質については特に問題なかったが，底生動物調査では，ゲンジボタルのエサのカワニナに代わって外来種のコモチカワツボやタイワンシジミが多数採取された。また，成虫体長は平均より小さめで，発光量も通常のゲンジボタルに比べ低めであった。発光に必要な成分の一つであるマグネシウム量は，カワニナに対してコモチカワツボは 4 分の 1，タイワンシジミは 10 分の 1 程度であったことから，カワニナの代わりにこれらをエサとしたことで，発光量が少なくなったと考えられた。このことから，外来種の存在はホタル減少の原因や生態系のバランスに影響を及ぼしている可能性があると考えられた。